

VI その他の事業

1 問合せ対応

富士宮市の歴史や民俗などに関する、市内外からの問合せ 36 件に対応した。

2 小中学校総合学習への対応

市内小中学校の総合学習（富士山学習）の一環として、児童・生徒の訪問に対応した。
また、各学校を訪問し講話を行った。

3 講師派遣

(1) 富士山まちづくり出前講座

富士山まちづくり出前講座は、市民の自主学習の支援や市政の広報のために設けられたものである。今年度も富士山文化課職員が講師となり、小学校や公民館に出向き、「ふるさとの歴史を学ぶ」と題して講座を開催した。



(2) その他の講座への講師派遣

世界遺産ボランティアガイド養成講座（世界遺産推進室で実施）の講師や、世界遺産構成資産の説明を行った。

写真 54 富士山まちづくり出前講座

表 5 富士山まちづくり出前講座実施一覧（学術文化財係担当分）

実施日	団体	場所	対象	人数	内容
平成 25 年 4 月 17 日	大富士小学校	大富士小学校	児童	179	
平成 25 年 10 月 18 日	ミズ艶会	歩く博物館 D コース（富士根北）	一般	25	歩く博物館
平成 25 年 11 月 9 日	大岩まちづくりプロジェクト	大岩 3 区	一般	20	
平成 25 年 11 月 21 日	精進川上区寄り合い処	精進川上区久保地集会所	一般	20	

表 6 その他講座への講師派遣

実施日	場所	対象	内容
平成 25 年 6 月 12 日	まかいの牧場	一般	世界遺産構成資産候補の説明
平成 25 年 7 月 9 日	休暇村富士	一般	世界遺産構成資産の説明
平成 25 年 11 月 22 日	長田東小学校（静岡市）	児童	富士山の歴史と文化
平成 25 年 12 月 4 日	富士根北公民館	一般	世界遺産ボランティアガイド養成講座
平成 25 年 12 月 12 日	上井出地域学習センター		

「上稲子八幡宮の厨子」指定調書

種 別	有形文化財（建造物）	員 数	1
名 称	上稲子八幡宮の厨子		
所在地	富士宮市上稲子 1630 番地		
所有者	富士宮市上稲子 1757 番地 宗教法人八幡宮 代表役員 齋藤静		
概 要	三間社、入母屋造り、平入り、正面軒唐破風及び千鳥破風付き。擬宝珠高欄の基壇上に建ち、両脇に脇障子を付す。奥行き一間で、その背面部分を略す。 柱は円柱、頭貫・台輪を載せて、二手先斗拱を詰組とする。禅宗様式を基調として、和様を折衷する。全体的に、漆塗り・金箔押し・彩色を施し、飾り金具を打つ。		
沿 革	製作時期に関する明確な史料はない。一説には、嘉永 2 年(1849)に京都より購入したとも、安政 4 年(1857)に搬入されたものとも伝えられている。 昭和 53 年に旧芝川町の有形文化財に指定されたが、平成 3 年頃より朽損が進み崩壊寸前であったので、同年秋より修復を始め、翌 4 年 7 月に遷座を行なった。		
指定理由	建築様式の外見所見からは、江戸時代末の特徴を示すものと判断される。細部に至るまで精巧に製作されており、建築様式も統一され時代性を良く保った作品である。		
備 考	・昭和 53 年 3 月 11 日芝川町指定文化財指定 ・平成 22 年 3 月 23 日芝川町指定文化財指定解除 ・『上稲子八幡宮一芝川町指定文化財上稲子八幡宮逗子修造調査報告書』平成 7 年 12 月 芝川町上稲子八幡宮厨子修造委員会 ・「旧芝川町指定文化財（建造物）について」 平成 22 年 11 月 建部恭宣		

「龍興寺の厨子」指定調書

種 別	有形文化財（建造物）	員 数	1
名 称	龍興寺の厨子		
所在地	富士宮市内房 3716 番地		
所有者	富士宮市内房 3720 番地の 1 宗教法人龍興寺 代表役員 手塚宗久		
概 要	方一間（間口 2.0 尺、奥行 2.0 尺）、宝形造り（ただし、小棟状のものを置き、寄棟造りとも解釈される）、板屋根（鍔葺（しころぶき）状、背面軒先切落し）。総高 4 尺 1 寸 5 分。 柱は円柱（直径 2.0 寸）、土台（成 1.85 寸）の上に立ち、内法長押（成 1.6 寸）を廻す。柱上に和様の三つ斗組物を載せ、中備（なかぞなえ）に撥束（ばちづか）を置く。柱頂部に頭貫を通し、端部は拳鼻（こぶしばな）となる。正面に両開きの舞良戸（まいらど）を建てる、内法高 2 尺 3 分。内部両端に円柱を立て、虹梁・組物を構えて奥を内陣扱いとする。虹梁には、渦と若葉の絵様彫刻を施す。内部に如意輪観音坐像を安置する。		
沿革	昭和 58 年に、旧芝川町の有形文化財に指定されている。その際の調査報告書によると、龍興寺は、興津清見寺四世説心和尚が隠居寺として、慶長 13 年（1608）に開山しており、開山にあたり本尊と共にこの厨子を持ってきたらしいとある。 厨子本体からは、製作年代に関する史料等は発見されていないため、厨子本体の状況から製作時期を推測する。 ケヤキの素木造りで、装飾も殆んど無く簡素な造りであるが、和様を基調として全体的によくまとめられている。 正面の頭貫や木鼻、さらに内部の虹梁に施された渦・若葉等の絵様彫刻は線が細く、彫りも浅い。また曲線が流れるように穏やかで優美である。県内における近世社寺建築総合調査の成果を参照すると、これらの特徴は、室町末期から江戸初期にかけて見られるものである。 以上のことから、本厨子の製作時期については、江戸時代初期と解釈してよい、と考えられる。慶長 13 年に隠居寺としてこの寺を創建した際に、新たにこの厨子が造られて持参したものではないか、という判断も可能である。		
指定理由	龍興寺厨子は、簡素な造りながら全体的に江戸時代初期の様式を示しており、富士宮市内における厨子の例として、貴重である。		
備 考	・昭和 58 年 10 月 5 日芝川町指定文化財指定 ・平成 22 年 3 月 23 日芝川町指定文化財指定解除 ・「旧芝川町指定文化財（建造物）について」 平成 22 年 11 月 建部恭宣 ・「龍興寺厨子」 平成 23 年 10 月 31 日再調査 建部恭宣		

「芭蕉天神宮本殿」指定調書

種 別	有形文化財（建造物）	員 数	1
名 称	芭蕉天神宮本殿 附. 棟札 2 点		
所在地	富士宮市内房 5820 番地		
所有者	富士宮市内房 5618 番地 芭蕉天神宮 総代 望月正一		
概 要	一間社、流造り、銅板葺き。ケヤキ素木造り。正面軒唐破風及び千鳥破風付き。身舎正面一間、背面二間、奥行二間、円柱。向拝一間、方柱、木階五級、浜床付き。身舎は中央柱筋で内陣・外陣に分かれ、正面に双折板唐戸を建てる。軒は二手出て丸桁を支え、二軒、繁垂木。 向拝廻りに彫刻が集中。水引虹梁と墓股が一体となっており、彫刻は正面が鳳凰、背面は麒麟。木鼻の彫刻は獅子に造り、左側の獅子は籠彫りの鞠を抱えるが鞠は足の上に載る。 身舎の縁は未完であるが、両側面及び背面に一段低い廻縁を取り付ける計画であった。		
沿革	棟札類より、以下のことが判明する。 明治 11 年(1878) 11 月頃、本殿を建立するための木材を山から伐り出す。柚(樺、きこり)を率いたのは、「望月重五郎」という棟梁であった。 明治 13 年(1880) 11 月 28 日落成。棟札によると、「匠長(たくみのおさ)」は由比宿に住む「柳室半兵衛」。 明治 14 年(1881) 正月に、屋根工事完成。		
指定理由	棟札によって、建立年代が判明した。造営に携わった大工は、由比住の柳室半兵衛を棟梁とする一派であった。 建築彫刻に関しては、三嶋大社の造営に関わった後藤芳治郎や小沢半兵衛・希道の参画が伝えられている。しかし、これを証する明確な史料類はなく詳らかでないが、彫刻の意匠や技法などからは、全くこれを否定できるものではない。 身舎廻りの縁やその他の部分において、未完のまま工事を打ち切った痕跡が認められるが、そのために建造物の持つ歴史的・建築的な価値をなんら低めるものでないことは明らかである。		
備 考	・平成 19 年 6 月 7 日芝川町指定文化財指定 ・平成 22 年 3 月 23 日芝川町指定文化財指定解除 ・「芭蕉天神宮本殿の建築に関する調査報告書」 平成 19 年 1 月 15 日 建部恭宣 ・「旧芝川町指定文化財（建造物）について」 平成 22 年 11 月 建部恭宣		

芭蕉天神宮本殿棟札銘文



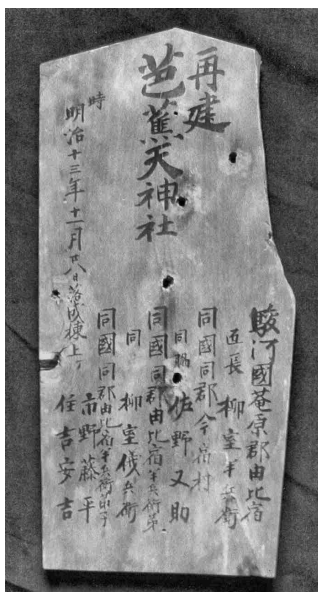
棟札 1

〈表〉

多願玉女神
色星玉女神
天星玉女神
芭蕉天神社
奉上棟大元尊神國常立神
彦狭知神
五皇龍神

〈裏〉

明治十一年十一月
内房村大晦日組三百六拾四番地
天神宮本社 杣棟梁望月重五郎



棟札 2

〈表〉

駿河國庵原郡由比宿
匠長 柳室半兵衛
同國同郡今宿村
同國同郡由比宿半兵衛弟
同 柳室議兵衛
芭蕉天神社
再建
同脇 佐野又助

時

明治十三年十一月廿八日落成棟上ケ
なし



棟札 3

〈表〉

明治十四年
巳正月吉日
駿河國安倍郡
静岡馬場町
家根方棟梁
伊藤治郎右衛門
同町 伊藤藤林吉
同町 伊藤藤林吉
人宿町式丁目
川橋茂吉
端村伊之助
山梨平吉
車町通老番町
杉岡徳治郎

〈裏〉

なし

「子安信仰」展

昔から、出産・育児は大切な事柄であり、安産や無事な成長を神仏に祈ることが熱心に行われました。富士宮市内でも子安信仰は盛んに行われ、いくつもの子安講が組まれてきました。ここでは、市内の子安信仰の寺社・石造物等やその信仰習俗を紹介します。

1 様々な子安信仰

子安信仰とは

出産・育児は大変なことであり、かつては難産の末に亡くなる者や幼いうちに亡くなる者も多かった。このため、安産や子授け・子育てを神仏に祈願することが熱心に行われた。子安信仰の形は様々であり、子安神・コノハナサクヤヒメや地蔵・鬼子母神などの神仏だけでなく、樹木や、時には産婆なども信仰される。

富士宮市内でも子安信仰は盛んである。杉田子安神社(杉田)や大岩子安神社(大岩)をはじめとする「子安神社」のほか、石祠や子安地蔵も子安の神仏として祀られる。また、村山浅間神社(村山)や本光寺(黒田)のイチョウの木には乳授けの信仰があり、福石神社(城山)や上井出・安居山の道祖神には子捨て・拾い子の信仰がある。羽鮒では腕の良い産婆を子安神として祀る。

集落で子安講を組む場所も多く、女性たちが集まり、掛軸をかけて拝んだり飲食をしたりした。



大岩子安神社(大岩)



子安観音(内房・瓜島)

2 産育のねがい

道祖神と子ども

道祖神は古い道筋や集落の境などに祀られ、行路安全の神や疫病を防ぐ神、夫婦和合や子孫繁栄のほか、子供の守り神として祀られることも多い。

道祖神の祭りとされるどんど焼きは、かつては子供が中心となって行った。この日は道祖神が子供を守ってくれるといい、夜遅くまで遊ぶことを許されたという。また、赤子の夜泣きがひどいときは道祖神にお参りすると治るといわれ、唐辛子やお線香を持ってお参りに行ったという地域もある。道祖神の前に捨て子をし、子供の厄落としをしたというところもあり、道祖神は多くの子供の成長を見守ってきたといえる。



道祖神(安居山)

太鼓石と撥石

猪之頭の遠照寺の境内には、太鼓石・撥石と呼ばれる石がある。太鼓石とは内部が空洞になった石(溶岩樹型)で、そのかたわらには撥石と呼ばれる石棒がある。これらは陰陽石を祀ったものとされる。陰陽石には、子授けや安産、豊穰を祈願するものもある。

かつては、この太鼓石の穴に女兒をくぐらせる風習があった。これは、伝染病の予防や、成人してからの安産祈願だといわれていた。



太鼓石と撥石(猪之頭)

捨て子と拾い親

市内では、生まれた赤子を箕に入れて道祖神の前などに一旦捨て、事前に頼んでおいた他の家の人に拾い上げてもらうという捨て子の風習があった。赤子を捨てる場所は、道祖神のほか、寺・神社の前や集落の辻などであった。捨て子をするとその子供は丈夫に育つといわれ、特に親が厄年であったり、過去に子供の不幸があったりした人が行った。拾い手となった人(拾い親)と捨て子とは一生の縁となり、実の親と同様に付き合ったという。

これは、子を捨てることで一旦親子の縁を切り、親の厄が子に移らず無事に育つように願ったものと考えられる。



福石神社(元城町)

福石神社

市内元城町にある福石神社の拝殿内には「福石子育市大明神」の扁額があり、安産・子育てを第一の信仰としている神社である。また、毎年7月31日に茅の輪くぐりが行われることから、「わくぐりさん」とも呼ばれる。

福石神社は、捨て子の場所として知られていた。ここに捨てられた子供は「神の申し子」といわれ、丈夫に育つといわれた。福石神社では、捨て子をしたら、親は決して振り返ってはならなかったという。また、拾いあげる家は決まっていて、赤子をもとの家に返すときはお祝いに扇子一對を添えたという。この風習は大正時代ころまで行われていた。



福石神社の扁額

福石神社のわくぐりさん

福石神社では、毎年7月31日に「わくぐりさん」(茅の輪くぐり)が行われる。福石神社では、入口と出口の2本の茅の輪が据えられる。神社の役員に続いて城山区内の子供たちも茅の輪をくぐり、無病息災を祈る。福石神社は子育ての神であり、区内だけでなく周辺の地域からも親に連れられた子供たちが茅の輪をくぐりに訪れる。かつては、屋台や紙芝居屋が出て、大変賑やかであったという。

3 杉田子安神社と子安講

杉田子安神社

杉田子安神社(杉田)は、安産・子育ての神として、市内だけでなく周辺地域からも信仰を集める。神社の創建は文政年間(1818～1830)とされ、「安」という女性を子安霊神として祀る伝承が伝わっている。杉田子安神社を信仰対象とする子安講も多く生まれ、祭礼の日には連れ立って参拝に来る女性たちや代参者で賑わったという。社殿に掲げられている大絵馬には、「北山村辻組女講中」や「山宮村宮内組女講中」など市内各地域の子安講の名が記されている。

神社には、安産・子授けのお守りとして「ほうこうさん」(這子さん)という素朴な人形が奉納される。また、お産が短時間で済むとして短い蠟燭を貰い受けることも行われた。



杉田子安神社 社殿

杉田子安神社の由来

神社に伝わる「履歴書」(年不詳)と「縁起書」(明治三十四年(1901))には、次のような子安神社の由来が語られている。

子安霊神(安)は、甲斐国八代郡佐野村(現山梨県南部町)の生まれで、寛政七年(1795)に父親が旅に出て行方不明になったため、甲斐国都留郡河口村(現山梨県富士河口湖町)に十五年季で奉公に出された。十年間良く働いていたが、嫁入り前に懐妊したため悪評が立ち、それを気に病んで、文化二年(1805)、湖に身を投げてしまった。そうして亡くなり霊となった後、奉公の残る五年間は霊のまま勤め先の家を守り、年季が明けてからは両親の供養と妊婦の守護のために日本全国の社寺を廻った。文政四年(1821)、子安霊神は父親が葬られていた杉田に来て、信心深い杉田村の女性に憑依し、自分を祀るように言った。そこで村役人たちは相談し、領主の許可を得て、「子安」として祀ることにした。

『角田桜岳日記』には流行り神として当時信仰を獲得しつつある様子があり、『袖日記』には家人の女性が出産前後に熱心に参詣する様子が記されている。少なくとも幕末期には杉田子安神社が信仰されていたことが分かる。



子安霊神像
(杉田子安神社)

杉田子安神社の信仰圏

杉田子安神社には、明治二五年(1892)の本堂建築、大正十三年(1924)の納骨堂建築、昭和十一年(1936)の社務所建築にかかる寄附名簿などが残されている。これらの資料には、参拝者だけではなく「世話人」が記されていることも多く、各地に杉田子安神社を信仰対象とする子安講が組まれていたことが分かる。これらの資料から、子安神社の信仰圏をうかがうことが出来る。

杉田子安神社は富士宮市・富士市の市境近くに位置し、両市に信仰の濃い分布を見る。加えて、富士山東麓の須山村(現裾野市)や原里村・富士岡村(現御殿場市)、駿河湾沿岸の戸田村・土肥村(現沼津市)にも信仰が見え、その信仰圏は広範囲に及んでいた。また、東海道筋では東は錦田村(現三島市)から西は興津町(現静岡市清水区)まで分布しており、東海道や十里木街道などが伝播のルートとして想定される。



杉田子安神社に奉納された絵馬

杉田子安神社社殿には各地の子安講が奉納した絵馬が掲げられている。写真は庵原郡南松野村(現富士市)の女講中が奉納したもの。

子安講

主に安産祈願のために女性が組んだ講で、出産適齢期の女性が時には子供を連れて集まり、唱え事をしたり食事をしたりした。地域の交流・楽しみの場でもあった。

市内では、集落単位で講を組み、当番の家を会場とすることが多い。子安霊神や題目曼荼羅の掛軸を本尊として掛け、味御飯(醤油味の炊き込み飯)などを供えて拝み、題目を唱えたりする。講員は米や金銭を出し合い、当番が用意した食事で会食する。講によってはお嫁さんだけが参加する場所もあり、食事やおしゃべりを楽しむ息抜きの意味合いも強かったという。

講の日取りは、杉田子安神社を信仰する講では、神社の祭礼の前日(4月9日・10月9日・1月9日)が多い。講の翌日、連れ立って杉田子安神社に参詣に出かけたり、代表者が代参したりしたという。



子安講の掛軸
(北山・貫間の子安講のもの)

子安信仰展

期 間：平成25年8月24日～平成26年1月13日
場 所：富士宮市立郷土資料館(富士宮市宮町14-2 市民文化会館1階)
問 合 せ 先：富士宮市教育委員会 富士山文化課
TEL)0544-22-1187 FAX)0544-22-1242

縄文時代草創期の集落跡

—国指定史跡—

おお しか くぼ

大鹿窪遺跡

所在地：静岡県富士宮市大鹿窪字東村



発掘当時の大鹿窪遺跡

○遺跡の概要

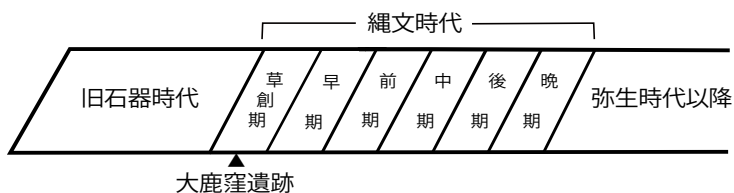
遺跡のあるところ

大鹿窪遺跡は富士山の南西、富士川の支流の芝川の東側、南西に向かう緩やかな斜面にあります。

遺跡は富士山の溶岩の上にあります。遺跡からは東側にある丘の上に富士山を望めます。この丘の東側は急斜面となっていますが西側は緩やかな斜面で旧石器時代から縄文時代草創期や早期などの遺跡が発見されています。

発掘調査で分かったこと

発掘調査では縄文時代草創期（今から約 13,000 年前頃）を中心にした遺跡であることが分かりました。縄文時代草創期は氷期が終わり地球が暖くなる時期で、動植物の生態系が大きく変化する時代になります。人々は洞窟から平野に出て煮炊きなどをする道具の土器や住居を作り、そこに留まりながら植物を集め魚や動物の狩りをする生活を送るようになりました。大鹿窪遺跡にはその跡が多く残されていました。大鹿窪遺跡は「定住生活が始まった時代の集落跡で溶岩などの当時の地形が残り土器や石器とともに当時の生活を想像させる貴重な資料があり、この時代の住居跡を考える上で極めて重要な遺跡である」として平成 20 年に国の史跡に指定されました。史跡の範囲には当時の様子が分かる溶岩や谷地形が含まれています。現在、遺跡は保存のために埋め戻されています。

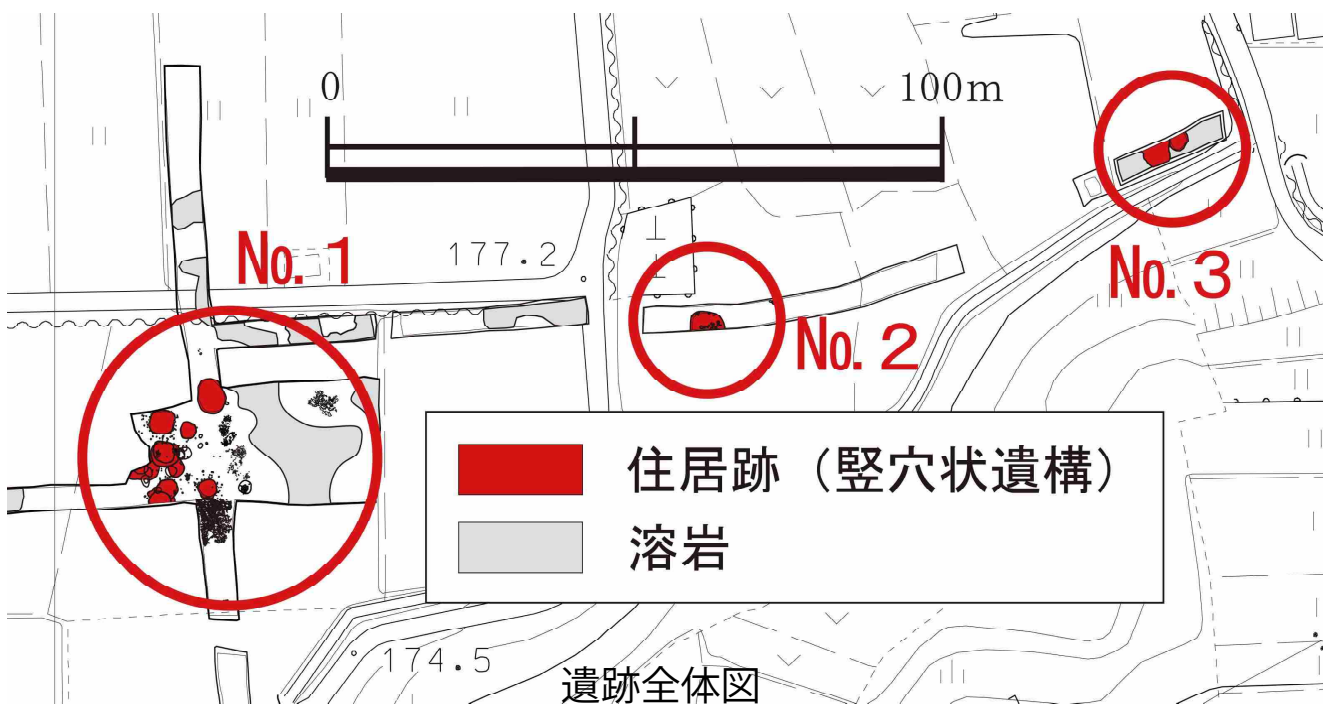


遺跡遠景と富士山

○ 遺構と遺物

遺構（遺跡で見つかった生活の跡）

縄文時代草創期の遺構は下図にあるNo.1～3の箇所からまとめて発見されました。No.1からは住居跡とされる^{たてあなじょう}竪穴状遺構 11基と石を並べた^{はいせき}配石遺構 5基、石を集めた^{しゅうせき}集石遺構 11基などが発見されています。住居跡の中や周辺からは縄文時代草創期の^{おうあつじょうもん}押圧縄文土器が出土しています。住居跡が重なりあっているものもあり、この地で住居を建て替えながら長く生活していたことが分かります。また住居跡の東（溶岩）側には遺構のない場所があり、溶岩の前には南北に並ぶように石を集めて置いた配石遺構や集石遺構がありました。No.2では竪穴状遺構 1基、配石遺構 1基が発見されています。この地点からは^{りゅうせんもん}隆線文土器が出土していて、No.1よりも古い時期の住居跡と考えられます。No.3からは竪穴状遺構 2基が発見されています。ここからは^{せんとうき}槍の先に付けられた尖頭器が多く出土しています。



No. 1 の写真（上空より）



1号竪穴状遺構



1号配石遺構

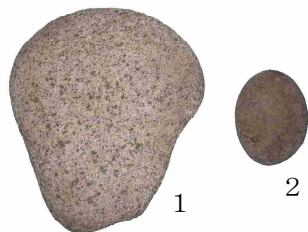
いぶつ 遺物（遺跡で見つかった生活の道具）

遺跡からは当時の人々が生活に使った道具が数多く発見されました。煮炊きや貯蔵の道具である土器や植物の加工に使われた石皿や磨石、尖頭器・石鏃（矢じり）など狩りの道具が出土しています。



写真① No.1 の出土土器

写真①は押圧縄文土器と呼ばれるもので土器のまわりに縄を押し付けたような模様が付いています。このような土器はNo.1の住居跡が集中した場所で数多く見つかりました。



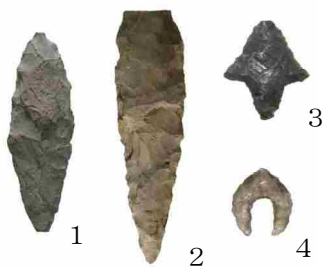
写真② No.1 の出土石器

写真②の1は石皿で、2の磨石を使って石皿の上で植物の加工（叩いたり潰したり）をしました。



写真③ No.2 の出土土器

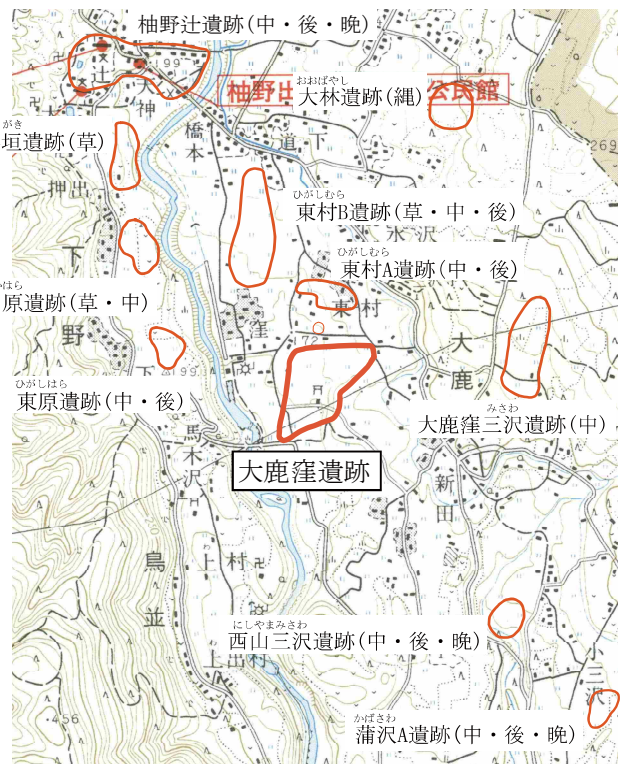
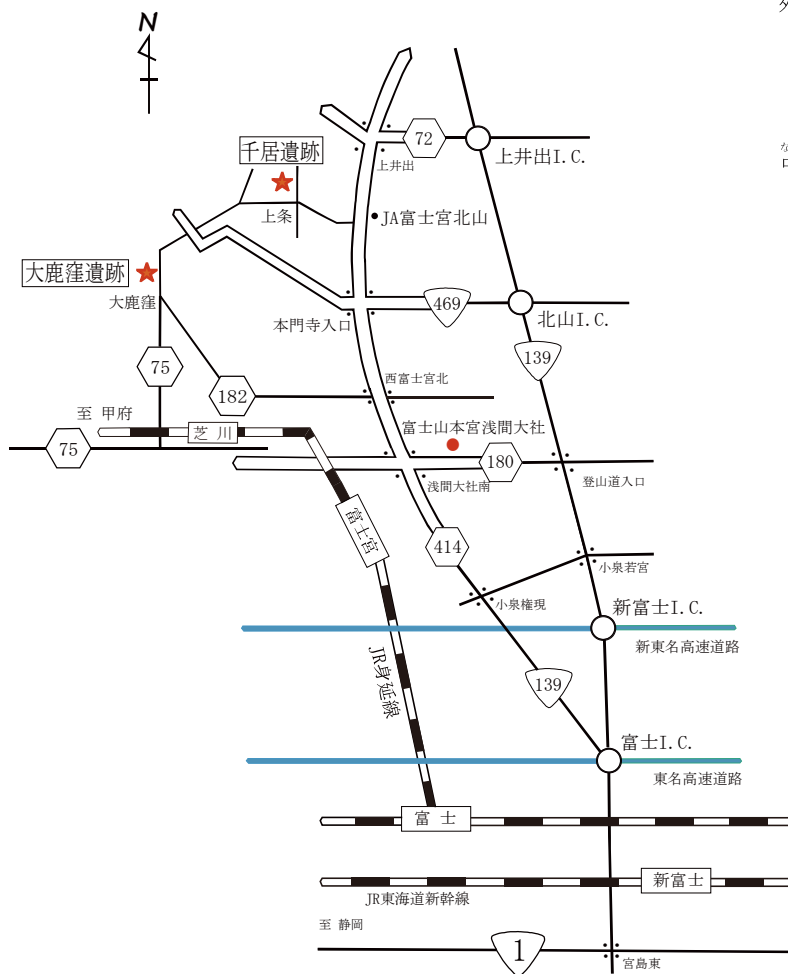
写真③はNo.2から出土した隆線文土器で口縁部や胴の上部に粘土を貼りつけたもので、細かく盛り上がった線が土器に付けられています。この隆線文は時期が新しくなると徐々に細くなる傾向があるようです。



写真④ No.3 の出土石器

写真④の1～4はNo.3から出土した石器で、1・2は槍先形の尖頭器で木の棒の先に付けて動物を刺したものです。3は木に付けるために舌状の突起がある小形の有舌尖頭器です。4は矢の先に付けられた石鏃です。

大鹿窪遺跡案内図



大鹿窪遺跡と周辺の縄文時代の遺跡

(草): 草創期、(早): 早期、(中): 中期
(後) 後期、(晩): 晩期
(縄): 縄文時代 (時期不明)

[アクセス]

富士宮市大鹿窪字東村426-1他

JR身延線富士宮駅から

バス・富士急静岡バス上柚野行き約30分「東村」下車徒歩約5分
車・約25分



現在の大鹿窪遺跡の様子

問い合わせ先
富士宮市教育委員会富士山世界遺産課
電話 0544(22)1187

H.25.10 発行